

教師の自覚としての仏教思想

木 下 富 夫

教壇に立つ者のバックボーンになる思想が、こういうものでありたいという私の意見を述べてみたい。

教師に限らず人間として、生活上に一つの信念（思想といつてもいいし、単に考えといつてもよい）を持つているのは当然である。この信念が、教師としてどう持ちたいかというわけであるが、これが教師として特定にあるわけではない。だが教鞭を持つが故に、自覚を新たにしたいと思う所以である。

私のもつてゐる授業観、それは教師と生徒との活動は菩薩行であり、華嚴という事事無碍の相だということである。この自覚のもとに毎日の教師としての仕事をしたい。この考えの起源は華嚴に発する。もちろん華嚴に入る前に空観に徹底せねばならない。徹底せねばならぬと思うところにすでに空

観を離れた考えがあるが、ここで私は維摩経を思いおこすのである。

維摩と舍利弗の樹下對話の模様によつて、吾人は空に空相のないことを知る。維摩が宴座を説明しているが、「滅定を起たずして諸の威儀を現す」・「道法を捨てずして凡夫のことを現す」・「煩惱を断ぜずして涅槃に入る」等という言葉が続いている。これは一切がそのまま空であること・空と有の二がないことを知らないで凡を捨てて、聖道を目標としたり・煩惱を断つてはじめて涅槃に入り得られるというような考えの誤りであることを舍利弗に知らせたものである。これによつて、一切の対境の即空を知り、彼此の分別・是非の分別を離れることが、空観の知慧であることを知る。空観の知慧は煩惱を断じて涅槃に入るのではなく、煩惱の無休即無を知るこ

とが涅槃に入ることにはかならない。真に空を知れば、差別相はその差別相を壊さないでそのまま空なりといわれるのである。

維摩と文殊の問答もみたい。

文問 この室、何を以て空にして侍者なきや

維答 諸仏の国土も亦た復た皆空なり

文問 何を以て空となすや

維答 空を以て空なり

文問 空何ぞ空を用いるや

維答 無分別空を以ての故に空なり

文問 空、分別すべきや

維答 分別も亦空なり

.....

文問 諸仏の解脱、当に何に於てか求むべき

維答 一切衆生の心行中に於て求むべし

この問答によつて知られるように、方丈の室の空と、真諦の空との二がないこと、後者は前者の方丈の空によつて顕わされ、しかもその室の空以外に真諦の空の求むべきでない所以が明らかに示されている。そして、対象的な思惟を離れて

無念の直下に空を知らねばならない。分別もまた空であつて、真の空は求むべきものでなく、一切現象を離れて求めることはできぬ。解脱についても、一切衆生の心行をはなれては求めることはできない。生死流転のただ中に、無求の求として、無分別の分別として、解脱を求めねばならぬということである。

次いで、舍利弗と天女との問答に注目しよう。

維摩の空室に一人の天女がいた。維摩の説を聞くうち忽然としてその身を現わし、天華を諸の菩薩と大弟子の上に散らした。菩薩の身の上にふりかかった華は皆落ちてしまつたが、諸の大弟子の身についた華は落ちない。大弟子たちは神通力をもつてこれを取り去ろうとしたが落ちない。この様子をみた天女は、舍利弗に、「なぜ花を取ろうとするのか」と尋ねる。舍利弗は答えて「この花は不如法だから取り去ろうと思う」という。天女は、「この花を謂つて不如法とすること勿れ。所以はいかん。この花、分別するところなし。仁者自ら分別を生ずるのみ。若し仏法に於て出家し、分別するところあるを不如法となす。もし分別するところなければ是れ則ち如法なり」という。分別によつて不如法が生じるが、無分別

になれば華は華としてそのまま光っているではないかというのである。舍利弗は、天女の自分を呵する言葉が丁度維摩のよくなをみて、それは天女が、この維摩の室に長く住んでその余風になじんだ結果であると思つて問うた。

舍 天女よ、この室に止まることそれ已に久しきや

天 我れ、この室に止ること耆年の解脱の如し

舍 ここに止ること久しきや

天 耆年の解脱もまた如何が久しきや

舍利弗黙然として答えず

天 如何ぞ耆和の大智にして而も黙せるや

舍 解脱は言説するところ無し、故に吾、是において云うところを知らず

天 言説文字皆解脱の相なり。所以はいかん。解脱は内ならず外ならず、両間にもあらず、文字もまた内ならず外ならず両間にもあらずればなり。この故に舍利弗、文字を離れて解脱をとくことなし。所以は所何。一切諸法は是解脱の相なり。

この問答は、解脱は無相であり、時間的でないこと、そして解脱は無相だといつても、無相という相があつては無相で

はない。したがつて、無相の解脱は、言説文字を棄却することによつてではなく、有相の文字の中に示されるべきことを述べたのである。上述のように、一切の差別の諸相は、無体即空であるということである。相にとらわれてはならぬ。解脱にもとらわれてはならないというのが天女の主張である。

それで舍利弗が、天女が悟りを開いていると思つて、その証するところは何かと聞く。天女は、我得することもなく、証することもなし。若し証するあらば、則ち仏法において増上慢人となすという。そしてその問答が、天女は女人の身をなせ転じないのかという点におよんで、女身のままで無体即空であり、女人といえども女人にあらずと言う。転ずべき女人なく、求むべき法もないところ、ただ空のみにして（空相なし）一切のそのままが解脱の相だというのである。

私はこの考え方にひかれる。証するものもなく、得するものもない。そのありのままの相のままで解脱だということ、この思想で常に教壇に立ちたいのだ。現実の相のままで、教室における相がそのまま空、その活動が、そのまま菩薩行であることを自覚したのである。

しかし、天女は「ただ増上慢人の為には、姪怒痴を離れる

を解脱となすと説きたまうのみ、若し増上慢なきものには、
仏は姪怒痴の性即ちこれ解脱なりと説きたまう」と述べてい
るように、煩惱に悩乱されつつもこれを端的に肯定すること
はさけたい。得するものもなく、証するものもないというこ
の言葉について、私は弘忍（五祖）・惠能（六祖）・神秀の話
をみたいと思うのである。

ある日、弘忍が弟子を集めて「自ら智慧を看、自の本心般
若の性を取つて、各一偈を作り来つて吾に呈して看せしめ
よ、若し大意を悟らば汝に衣法を付し、第六代の祖と為さ
ん」といつた。弟子どもが神秀が上座であつて、これにかな
わないから今後神秀を師とせんとし、偈を呈しなかつたの
である。神秀もまた直接五祖に渡さないで「廊下に向つて書
き著けんには和尚の看見するに従つて忽ち若し好しといわば
即ち出でて礼拝してこれ秀の作なりといわん」と考へて偈を
南廊の壁間に書いた。

身は星れ菩提樹 心は明鏡の台の如し
時々に勤めて払拭せよ 塵埃を惹かしむること勿れ
これに対して惠能は次の偈を唱えたのである。

教師の自覚としての仏教思想

菩提もと樹なし 明鏡また台に非ず

本来無一物 何れの処にか塵埃を惹かん

かような結果、惠能は五祖弘忍より衣鉢をもらつて南へ向
かうことになつた。神秀のいうように、時々勤めて払拭し
なければならぬならば二元的である。時々塵埃を払拭し
て所謂精進して、仏（空・悟り）に近づこうとするような目
的の仏と、それから払拭すべきものがあつてはならぬ。惠
能のいうように、本来無一物でなければならぬ。塵埃もま
た空・明鏡も明鏡とすべきものなくただ空なのである。

神秀は、南へ立ち去つた惠能を追つていつたが、その結
果、大庾嶺に至つて神秀は惠能から教をうけることになつて
しまつた。「衣鉢は法にあらず、汝若し自己の面目を返照すれ
ば、法は汝が辺にあらん」と惠能は教えた。五祖弘忍からう
けとつた衣鉢（衣や鉢を行道の印としてもらうが、それを指
すのではなく、ここでは教え授つた法をさす）は、弘忍から
秘かに得たものではない。得られるべきものでもなく、与え
らるべきものでもない。本来無一物なのだ。法は求められる
べきものではない。分別するところなければ即ちこれ如法で
ある。私たちは、時々勤めて払拭して塵埃をなからしめる

立場で教壇に立つのか。いや、私は払拭すべき塵埃も明鏡もともに空にして、そのまま互に光つていてという立場を胸にひめていたい。だからといって増上慢人になるのではない。

個物は現象とみられる。現象は因縁によつて生じるという考えも相当に強い。この場合、因縁によつて生じるものならば、それは絶対的な個物ではないものをその個物のうちに蔵していると云える。蔵しているというよりも尚一層根源的ないい方では因縁によつて生じることは、そのもの自体でないもの（空なるもの）ということにならないだろうか。自性という言葉をかきうるならば、無自性であるが故に即ち絶対不変のものでない故に因縁によつて生じるということが出来る。土に土としての自性がない故に、土よく陶器となりうるし、陶器に陶器としての自性がない故に土から生じうる。土にも陶器にもその自性がないのだといえる。自性なく即ち空なるが故に因縁によつて個物（現象）たりうるのだ。このことは、否定概念として考えてはならぬ。個物に自性がないということ、空であるということは、その無自性の故に、空なるが故に、個物そのものの存在を可能にしているということである。

ある。

この、現象が空であるということは、維摩経にもあつたように、そのままで解脱の相である。この解脱の相は、単に空だということではなく、空がその相をとつていてということである。即ち空の現成が現象である。個物である。この個物が空（仏とも理ともよんでよい）の一部をもつて現成しているのではない。空がそのまま（全空のままで）その一個物となつたのである。

空は一一に全徹している

といわれる。個物は空の一部としてあるのではなく、全空が個物と成つているが、個物Aにも個物Bにも全空が全空のまままで現成している。そんなあり方でAとBがある。全空のままAに現成すれば、Bには全空のまま現成できないと考えるなら全空を対象つけて考えた思想であつて、上述して来た空ではない。空は分限されるものではないから、この徹し方が絶対的全徹である。

法蔵がときの帝に華嚴の講義をした。このときの論を金獅子章といつてゐるが、これには「金に自性無く、工巧匠の縁に随つて遂に獅子の相起ることあり」とある。金は無自性、

即ち空（真理・仏）であつて不変である。この不変というのは空を意味する。この空が少しでも動ずるなら、それは縁に随つて、個物（獅子）となるのだ。即ち上述のような全徹というあり方で、空は個物となる。この全く空としての個物が真実の個物・現象である。たとえば、波はどこまでも水であつて波ではない。しかし水は波によつてのみ知りうる。空は個物によつてのみその空なることを知りうるのである。どの現象（個物）をとらえてみても、それは空であり、空は個物としてのみ空なのだ。

個物Aも個物Bも、それぞれ空の全徹である。言いかえれば、空が動じたものがAであり、Bである。AはA以外の世界をすべてもつており、BはB以外の全ての世界をもつていて、AもBも互に相容している。私はこのあり方が個物の本来のあり方と考える。A・BそれぞれがA・Bであることを失わずにA・B等すべてが円融している。いま、多数のローソクを立てたとしよう。多くのローソクは、夫々のローソクであることを失わず、しかもその光は円融している。どこからどこまでがAのローソクで照らし、Bのローソクはこの隅をてらすというようなことはない。どこからどこまでも同じように

とけあつて一つの光となつてゐる。しかも、ローソクは自分のローソクとしてゐるのだ。

私はこのローソクのような世界（事事無碍）として、社会をみていきたい。教鞭をとるについても美醜・善惡そのままが本来空であると自覚し、すべての子らが空の現成したものであり、空の現成したものと、空の現成したものが、互に遊劇三昧している。教師の教鞭が、そのまま菩薩行であり、子どもらの活動がそのまま菩薩行を行じているとの自覚をもつて教壇に立ちたいと思うのである。教師としてゐるんなものを教えるであろう。指導要領に示された道德の授業もするだろう。それでよいのだが、その行動とともに菩薩行を行じているというその自覚、子どもらが空の現成したものだという自覚、そういう自覚をもつて毎日の教鞭をとりたいと思うのである。